

梅花女子大学 機関リポジトリ

平重盛と朝廷儀礼

著者	前田 英之
雑誌名	梅花女子大学文化表現学部紀要
号	12
ページ	40-57
発行年	2016-03-22
URL	http://id.nii.ac.jp/1306/00000037/

平重盛と朝廷儀礼

前田 英之

はじめに

平清盛は、平治の乱における戦功によって、永暦元年（一一六〇）六月に正三位に叙され、同年八月には参議に昇進した（以下特に断らない限り、昇進に関する記述は『公卿補任』に依拠）。清盛を皮切りに現任公卿を輩出するようになった平家一門は、貴族社会の構成員として必然的に朝廷儀礼への出仕や勤仕が求められる立場となった。

その中で本稿が注目するのは、清盛の嫡子・重盛の貴族社会における動向である。高橋昌明氏が指摘するように、清盛は仁安四年（一一六九）春に摂津国福原へと移り、その後は治承三年（一一七九）政変にともなう平家政権の成立時まで、ほぼ福原で居住した^①。一方で清盛の福原移住後、京で平家の家督として活躍したのは重盛であつた。従つて、一一七〇年代（重盛は、治承三年七月病死）の平家の政治的位置を理解するには、重盛の動向を押さえることは不可欠な作業といえよう。

ところで、貴族社会における平家の動向は、清盛以前の段階、すなわち平正盛・忠盛については高橋氏が網羅的な検証を行い、彼らの成長過程を精緻に跡づけて明らかにした^②。また、清盛以後については、公卿化にともなう儀礼・行事などとの関わりについて松蘭斉氏の成果があり、それが到達点となっている^③。氏は、平家公卿が上卿を勤仕した回数が他公卿家と比較して僅少にとどまることから、彼らの器量不足を指摘し、儀礼が壁として立ちばだかつたと論じた。こうした評価は、平家一門が公卿議定へと出

仕することがほとんど無かつたことを明らかにした元木泰雄氏や下郡剛氏の指摘とも合致しており^④、平家公卿の性格の一面を的確にあらわしているものと考ええる。

但し松蘭氏も指摘するように、重盛が平家一門の中で儀礼勤仕の中心的役割を担い、重要儀礼において上卿を勤めたケースが確認できる点は注目に値すると考える^⑤。そもそも、それまで公卿家としての先例を持たなかつた平家が、その他の公卿家と比べて上卿の勤仕回数が少なかったことは、当然といえよう。さらに、政務能力にも問題を抱えていたとする松蘭氏らの先行研究の成果を踏まえれば、そうした条件下にありながら重盛が上卿を勤仕した事実は、もう少し注目されても良いように思う。そこで本稿では、十二世紀後半期に平家が公卿化を果たしたことで必然的に生じた朝廷儀礼との関わりについて、特に重盛がそれを執行した事実 zu 焦点を当てて、その意義を明らかにすることを課題とする。

その際、重盛が中心であつた一一七〇年代の平家は、以後も公卿の家として貴族社会に存続・展開する可能性を持っていた点に留意して検討を進めたい。治承三年七月に重盛が亡くなった直後、同年十一月のいわゆる治承三年政変にともない平家政権が成立し^⑥、また元暦二年（一一八五）三月には、平家は壇の浦合戦で滅んでしまう。だが、それ以前の重盛の段階については、政権成立や滅亡といった結果にとらわれず、重盛が平家を公卿の家として確立させ、さらには次世代以降へと存続させようとする構想の下で動いていたと見て分析する視角が有効だと考える。清盛の任大臣につ

いては膨大な先行研究の蓄積があるのと比較して、安元三年（一一七七）三月に重盛が内大臣に昇進した意義に触れた研究がほとんどないのは、こうした視角からの分析が十分にはなされてこなかったことを示すものといえよう。

なお、主に一一七〇年代の貴族社会内での平家の位置づけを扱う本稿の作業は、立荘をめぐる政治状況の規定性や家領の領有と家格との連関を指摘していた西谷正浩氏・川端新氏らの研究成果を踏まえれば⁷⁾、平家が当該期の立荘推進勢力⁸⁾として振る舞い得た要因について、より正確に捕捉することを可能とするものと考えてる。

右のような視角から作業を行う前提として、まずは重盛が家督だった時期に儀礼との関わりが顕在化した背景について、当時の重盛が直面していた課題との関係から確認しておく必要があるだろう。そこで、重盛が「公的に平氏を代表する立場」に立ったと元木氏が論じた仁安二年の時点から考察を始めて⁹⁾、重盛の課題を具体化していくことにしたい。

第一章 平重盛の昇進と課題

平重盛は、長寛三年（一一六五）五月に参議へ昇進し、現任公卿の仲間入りを果たした。翌永万二年（一一六六）七月には権中納言に、さらに同年十二月には清盛と交代で憲仁親王（のち高倉天皇）の東宮大夫¹⁰⁾に任じられる。こうした昇進過程の中で特に注目されるのが、仁安二年（一一六七）二月十一日、清盛が太政大臣に任官したのと同じ日に権大納言に補任されたことである。元木泰雄氏は、この権大納言への任官に注目して、重盛が「公

的に平氏を代表する立場」に立ったと主張した。

これと同日に清盛が昇進した太政大臣の性格については、当該期には名誉職と化し、在任期間が短期化していたことが橋本義彦氏により明らかにされている¹¹⁾。従って、清盛の現任引退が目前に迫ったことが浮き彫りとなったのと同時に重盛が権大納言へ昇進した一連の人事では、貴族社会における清盛の後継者としての重盛の立場が確認されたと見て相違なからう。

なお、この直後の同年五月十日に重盛に対して発給された「海賊追討宣旨」は、平治の乱以後、清盛が実質的に有してきた国家的な軍事警察権を継承することを認めたものと評価されている¹²⁾。また、五月十七日に清盛が太政大臣を辞した際には、重盛が平家の「家督」として振る舞ったことが『兵範記』に明記されている¹³⁾。仁安二年の前半期には、清盛から重盛へ権力の移行が図られていたことがうかがえるのである。

では、清盛の跡を継いだ重盛は、貴族社会における昇進という点についても、清盛の昇進を継承できたのだろうか。

既に触れたように、清盛は大臣の壁を突破している。仁安元年十一月に内大臣に任じられ、さらにその約三ヶ月後の翌年二月には太政大臣へと昇進するのである。大臣への昇進を可能とした要因については、後白河上皇による強引な引き立てとの見方や、清盛が皇胤ゆえに特別待遇を受けたとの指摘など、近年でも多くの先行研究により分析が加えられている¹⁴⁾。そうした議論の中で本稿が重視したいのは、清盛の内大臣昇進が、その直後の太政大臣への任官まで見据えた、すなわち引退を前提とした人事であったとする理解である¹⁵⁾。既に橋本氏が指摘した通り、当該期の太政大臣は名誉職化し、任期も短期化していた。従って、わずか三ヶ月後にそうした位置づけにあった太政大臣へと転じることになる清盛の内大臣昇進は、その直

後の現任引退まで視野に入れた特別措置だったと見られるのである。つまり、清盛は引退を前提に大臣の壁を突破したということになる。実際、清盛は、太政大臣就任から約三ヶ月後の仁安二年五月十七日、それを辞退している。そして、当面の間は在宅諮問の対象となるなど国政への関与を続けるものの⁽¹⁶⁾、翌年二月に大病を患い出家すると、仁安四年春には福原に「遁世」し、京都の政界と距離を置くのである⁽¹⁷⁾。

こうした清盛の大臣昇進への経緯を念頭に置けば、重盛が父の異例の昇進を継承することは容易ではなかったように思われる。重盛は、安元三年（一一七七）三月に内大臣に任ぜられるが（後述）、この任大臣は清盛の場合とは決定的に意味合いが異なる。繰り返しになるが、清盛が大臣に昇進できたのは、現任引退を前提とする特別な人事だったからであつた。一方で重盛の場合は、治承三年（一一七九）三月に病のため辞退するまで（同年七月に死去）、二年以上に及び内大臣として現任を続けている。すなわち、重盛の任大臣は引退を前提とする昇進ではない。そのため、父・清盛の大臣就任が短期間にとどまるもので、実質的に先例がない中で大臣へ昇進するには⁽¹⁸⁾、平家を大臣家に相応しい公卿の家として確立させる必要があつたと見られるのである。

この点について、重盛が平家を代表する立場となつた仁安二年以後の昇進過程を追う中で、もう少し具体化しておくことにしたい。

清盛が福原へ「遁世」する直前の仁安三年十二月、重盛は病のために一時的に権大納言を辞した。嘉応二年（一一七〇）四月に復職するも、同年末には再びそれを辞している。但し、翌承安元年（一一七一）十二月に再び権大納言に復帰すると、承安四年七月には右近衛大将を兼任、さらには安元三年三月に内大臣に昇進し、病が悪化する治承三年三月まで現任を続

けている。

このうち、平家を大臣家に相応しい公卿の家として確立させる上でとりわけ重要だったと考えるのは、以下の二点である。

一点目は、承安元年十二月八日の権大納言への復任である。この人事は、同月十四日に控えた徳子（清盛女。入内にあたり重盛の猶子となつた⁽¹⁹⁾）の高倉天皇（後白河息）への入内にともなう外戚関係の構築との兼ね合いから理解できると考える。

橋本義彦氏は、白河・鳥羽・崇徳・後白河天皇の外戚となつた閑院流藤原氏（徳大寺家・三条家）や堀河天皇の外戚となつた村上源氏が、摂関家に次ぐ家格である「清華」を形成したことから、大臣昇進を極官とする清華家は、外戚化を梃子に整備されたと論じた⁽²⁰⁾。従つて平家の場合も、元木氏が「清盛は、王家との婚姻関係を背景に平氏の家格を向上・安定させ」ようとしたと評しているように⁽²¹⁾、家格の確立が企図されていたと見られる。但し、この点に関して注意しておきたいのは、高橋昌明氏が論じたように、後白河上皇が入内について清盛と福原で相談した後、最終的な打ち合わせは重盛と行つたとみられ⁽²²⁾、実際に右の通り重盛は入内の日程に合わせて権大納言に復帰していた点である。ここから、外戚関係の構築後、家格を確立させるため尽力したのは、福原で「遁世」していた清盛というよりも、当時平家を代表する立場にあり、現任公卿として活動していた重盛であつた点を確認しておきたい。

二点目として、承安四年七月に、重盛が右大将を兼ねるようになった点も見逃せない。玉井力氏は、近衛大将への任官や三位中将から中納言への昇進を自らの家の世襲的な職歴に取り込んだ家を清華家だと指摘している⁽²³⁾。従つて、既に白根靖大氏も論じているように、平家一門で初めての近衛

大将への任官には、清華の家格に手をかけたとの意義があったものと見られる⁽²⁴⁾。

但し、「手をかけた」清華の家格を確立させるには、個人の極官や昇進コースの問題にとどまらず、それが半自動的に子孫に継承されるよう動く必要があった⁽²⁵⁾。従って重盛の場合も、右大将任官という契機を逃さず家格を確立させ、さらにはその定着を図ることが求められていたと見られるのである。

以上本章では、重盛が清盛の異例といえる昇進を継承する際、平家を大臣家に相応しい公卿の家として確立させるという課題を抱えるようになったことを論じてきた。その点で、①承安元年の外戚化、②承安四年の右大将任官により、大臣昇進を可能とする清華の家格に手をかけたことは確かに大きな成果であった。だが、これらはあくまで「手をかけた」にとどまるものである。重盛には、それらを政治的要因による一時的な昇進に終わらせることなく定着させ、次世代以降に継承させることが求められていた。

重盛の右大将任官にあたって、九条兼実は「將軍者頭要也、古来撰其人^所補来^也、今重盛卿、於^二当時^一尤可^レ謂^二当仁^一」と、貴族社会の人材不足を歎きながらも、その中にあって重盛は適任であるとの感想を記している⁽²⁶⁾。実際、右大将への任官後は、重盛が重要儀礼において上卿などを勤仕するケースが確認できるようになる。そこで以下では、家格の確立・定着という視点から、重盛が平家の代表となつて以後、顕在化する儀礼関与について検証していくことにしたい。まずは次章にて、朝廷儀礼の用途面における関わり方に分析を加える。

第二章 平重盛と公事用途

平家による用途の調達は様々な場面で確認ができ、白河上皇と結びつく契機となつた正盛による六条院への伊賀国鞆田荘の寄進⁽²⁷⁾、忠盛が内昇殿を許可された得長寿院の造営⁽²⁸⁾、清盛による後白河上皇への経済的奉仕として知られる蓮華王院の造営⁽²⁹⁾などが、平家の成長を論ずる際にトピックスに取り上げられてきた。儀礼用途についても、五節舞姫や二条・高倉天皇の八十島祭などで多大な負担を行ったことが指摘されている⁽³⁰⁾。このように従来の研究では、用途の大口負担者という側面に注目が集まり、公事用途調達への関与もそうした側面から捉えられてきた。

ところが近年、遠藤基郎氏は、言仁親王（高倉天皇・中宮徳子の皇子、のち安德天皇）の御産儀礼において、重盛が諸国所課を賦課する主体となつていたことを論じた。それまで上皇・摂関家のみに限定された御産儀礼での用途の諸国所課を、重盛が行つたというのである⁽³¹⁾。この注目すべき見解に導かれながら、重盛が用途調達において果たした役割についてもう少し掘り下げて検討したい。

言仁親王は、治承二年（一一七八）十一月十二日に誕生した。御産後、三夜・五夜・七夜・九夜には、産所において祝宴を催す産養の儀が行われる⁽³²⁾。当時の産養は、三夜は「本宮」（母后）、五夜は「后父」、七夜は「公家」、九夜は「親昵后宮并公卿等」が主催者となり、用途を調達するのが「流例」とされていた。言仁親王の場合は、御産に先立つ八月二日に御産定が行われ、三夜は中宮徳子、五夜は平重盛（徳子養父）、七夜は高倉天皇、九夜は上西門院が、それぞれ沙汰することと定められた。この御産定は、出仕者は「今夜着座公卿八人、是承曆例也」であり、用途の負担者を記した

【表1】言仁親王御産産養 三夜・五夜所課一覧

三夜定文 中宮徳子

所課	内容	負担者	中宮職
御前物	榎木大盤6脚、銀筥1口、他	中山忠親	権大夫
児御衣	御衣1合、御襠褌1合	平時忠	大夫
〃	御衣1合、御襠褌1合	平維盛	権亮
饗	上達部20前	平重衡	亮
〃	殿上人30前	平基親	大進
〃	侍所30前	藤原宗頼	大進
〃	女房衝重30前	藤原尹範	少進
〃	女房衝重30前	源兼資	進
〃	庁20前	惟宗季高	大属
屯食	盛屯食10具	—	—
〃	荒屯食10具	—	—

作者：平重衡（中宮亮）

五夜定文 平重盛

所課	内容	負担者	受領	国主	備考
(御前物)	(未詳)	—	—	—	定文欠落部分
(威儀御膳)	(未詳)	—	—	—	〃
児御衣	御衣2重、御襠褌6重	—	—	—	
饗	上達部20前	平通盛	越前	平重盛	
〃	殿上人30前	平通盛	越前	平重盛	
〃	侍所30前	平師盛	若狭	平経盛	
〃	諸大夫30前	—	—	—	
〃	女房衝重60前	平経正	丹後	平重盛	
〃	女房衝重60前	平忠房	能登	平教盛	
〃	庁20前	平為盛	紀伊	平頼盛	
〃	雑饗30前	—	—	—	
屯食	盛屯食15具	—	—	—	
〃	荒屯食15具	—	—	—	
高坏物	12本	中原盛業	壱岐	(不明)	盛業＝家司
祿	織物掛・袴3具、綾掛・袴6具、他	—	—	—	

作者：藤原敦綱（重盛家家司カ）

註 ・『山槐記』（『御産部類記』所収）治承2年8月2日条より作成。
 ・定文の作者は、『兵範記』（『御産部類記』所収）治承2年8月2日条。

定文も「承暦定文案」を例文として作成されたように、承暦三年（一〇七九）七月の善仁親王（のち堀河天皇）の御産を先例として、それに倣って催された。

遠藤氏は、この三夜・五夜の用途調達に分析を加え、「平重盛が五夜担当者となり、饗膳を越前守通盛以下に所課した。また中宮徳子分三夜産養について「親昵受領」へ所課するよう指示を出している」として、重盛が

諸国所課を行ったと指摘したのである。

この時に作成された定文に基づいて、三夜分・五夜分の献上物とその負担者を一覧にしたのが【表1】である。これによると、三夜分の所課はいずれも中宮職関係者によって請け負われていたことがわかる。三夜分については、重盛が諸国所課したわけではなく、中宮職により用意されていた。従って、遠藤氏の指摘通りであれば、重盛が諸国所課を行ったのは五夜分

ということになる。五夜定文は、『山槐記』（『御産部類記』所収）に引用され、前半の一部が欠落しているものの、所課状況はおおよそ【表1】の通りに復元できる。この所課に際して重盛は「親昵受領等欲入定文」、如何」と提案し、「親昵受領等」すなわち越前守平通盛・若狭守平師盛・丹後守平経正・能登守平忠房・紀伊守平為盛・壹岐守中原盛業ら一門・家司の受領たちに割り当てられることになったという。彼らが実際に定文に加えられたことは、【表1】より確認できる。恐らく、定文の欠落部分には、御前物・威儀御前などの項目について記されていたと想定される⁽³⁴⁾。この欠落部分や負担者の名前が記されず未詳の所課については、「承暦例」に基づいて諸国所課する形で調達された可能性もある。とはいえいずれにせよ、重盛が指示した諸国所課の対象には、多くの平家知行国が含まれていたことは明らかといえる。

では、「承暦例」に則して準備が進められ、従来通り諸国所課することも可能だった五夜分の用途の多くが、平家知行国への所課によって調達されたのは何故だろうか。

以下でも触れる通り、言仁親王御産に係る儀礼は、この後も順次進められ、それらは必然的に恒例儀礼・行事と重複することとなる。その一つに、御産の直前、十月末に派遣された春日祭使との重複があった。九条良通が使を勤めることになった春日祭使の雑事定は、十月十六日に催され、その用途は受領にも諸国所課されることになった⁽³⁵⁾。ところが、この用途調達を実質的に差配していた良通の父・兼実は「御産七日内、若春日使相当者、可勤前駟之者定指合夜々役敷」⁽³⁶⁾と、産養の日程と重なった場合、前駟の人数が集まらなくなることを危惧していた。また、本来であれば諸国所課できるはずの用途についても、「依指合御産、諸国不可有実勤

、私致用意之由、申院了」⁽³⁷⁾と、御産関係儀礼の用途賦課と競合して所課できなかった場合は、九条家で自弁するとの意向を後白河に申告するなど、対応に苦慮している様子が窺える。

このように、御産関係儀礼は他の恒例儀礼と財源を共有していた。それ故に、重盛は五夜分の諸国所課の多くを「親昵受領等欲入定文」と提案し、用途の賦課が競合する状況下において、それに配慮した所課を行っていたと見られるのである。

臨時公事の用途調達と重盛の関与について、引き続き言仁親王御産関係儀礼である五十日儀・百日儀に検討を加えることで、右の主張についてさらに深めていくことにしたい。

翌治承三年正月六日に行われた誕生五十日を祝う五十日儀は、東宮職が沙汰することとなった。というのも、御産からわずか一ヶ月余りの十二月十五日に、早くも言仁親王の立太子が行われていたからであった⁽³⁸⁾。東宮職が五十日儀を沙汰するのは「古今未有」、「無先例」との事態であったという⁽³⁹⁾。そのため、急遽所課を行っても、東宮職関係者だけで用途を調達することは難しかったものと見られ、諸国所課による調達が図られた⁽⁴⁰⁾。所課の内訳を示したのが【表2】である。これによると、所課が確認できる十八ヶ国のうち、平家知行国は七ヶ国に及んでおり【表2】「国名」欄の＊印が平家知行国を指す）、当時九ヶ国程度だったと見られる平家知行国⁽⁴¹⁾のほとんどが所課の対象となっていた。加えて、重盛が主上御膳「No.19」を沙汰していた点、二月二十二日に催され五十日儀と比べて日程に余裕のあった百日儀の用途が全て東宮職関係者で調達されていた点【表3】参照）を踏まえれば、用途調達の難航が予想された五十日儀については、重盛が

【表2】言仁親王五十日儀 諸国所課一覧

No.	所課内容	国名	守	国主
1	内殿上椀飯（飯20杯・菜20杯・菓子2外居）	信濃 ※1	藤原実教	（未詳）
2	内台飯所椀飯（飯20杯・菜20杯・菓子2外居）	*播磨	平行盛	平宗盛
3	中宮女房衝重（30前）	*越前	平通盛	平重盛 ※2
4	中宮女房衝重（30前）	*紀伊	平為盛	平頼盛
5	中宮侍所饗（20前）	越後 ※3	藤原雅隆	藤原光隆
6	中宮庁饗（20前）	和泉	平信兼	（未詳）
7	東宮殿上饗（20前）	備前 ※4	藤原時房	藤原邦綱
8	東宮女房衝重（20前）	*丹後	平経正	平重盛
9	東宮藏人所饗（20前）	常陸	高階経仲	高階泰経
10	東宮庁饗（20前）	*駿河	平維時	平宗盛
11	啓陣（20前）	石見	藤原能頼	藤原光雅
12	粉物長櫃（10合）	丹波	藤原行雅	花山院兼雅
13	粉物長櫃（10合）	因幡	藤原隆清	藤原隆季
14	粉物長櫃（10合）	*若狭	平師盛	平経盛
15	粉物長櫃（10合）	甲斐	藤原為明	（未詳）
16	粉物長櫃（10合）	美作	藤原基輔	九条兼実
17	籠物（50棒）	土佐	平宗実	藤原経宗
18	公卿衝重	*尾張	平知度	中宮徳子
19	主上御膳	内大臣	平重盛沙汰	
20	地下衝重	内蔵寮		

註・典拠は、全て『山槐記』治承3年正月6日条。

- ・※1 当初、遠江守藤原盛実（国主俊盛）が調進予定も変更。
- ・※2 『山槐記』の国主＝教盛との記載は誤り。重盛に訂正。
- ・※3 『山槐記』の越中との記載は誤り。越後に訂正。
- ・※4 尾張守平知度（中宮徳子分国）が調進予定も変更。

用途を差配する役割を担ったと判断するのが妥当であろう。重盛は他の儀礼との兼ね合いや調達状況を判断して、用途を差配していた。まさに、御産関係儀礼を執行していたのである。

遠藤氏は、立后・御産などに見られる摂関・上皇・皇族を主体とする「非公家沙汰諸国所課」は、貴族社会内での贈与慣行を原型に摂関期にあらわれ、院政期に体制化したものであることを明らかにした。それ故に、藤原道長・頼通以来の後見としての先例を持つ摂関家や、摂関家の先例を継承

【表3】言仁親王百日儀 所課一覧

No.	所課内容	担当者	役職
1	上御前物	藤原経宗	東宮傳
2	中宮御前物（懸盤6脚）	平重盛	—
3	宮御前物（御台6本）	平重衡	春宮亮
4	折櫃物（50合）	花山院兼雅	春宮大夫
5	折櫃物（51合）	平知盛	春宮権大夫
6	饗（上達部・殿上人）	藤原光長	春宮大進
7	饗（中宮侍所）	高階経仲	春宮権大進
8	饗（中宮女房衝重）	平時兼	春宮少進
9	饗（中宮庁）	中原成挙	春宮大属
10	饗（宮女房衝重）	—	東宮庁
11	饗（帯刀陣）	安倍資成	春宮少属
12	饗（藏人所）	—	宮別納所
13	饗（東宮庁）	安倍資元	春宮権少属
14	椀飯（内殿）	平重衡	春宮亮
15	椀飯（内女房）	平維盛	春宮権亮
16	屯食（盛屯食20具・荒屯食20具）	藤原光長	春宮大進・行事
17	祿（白大掛・疋絹・布）	平重衡	春宮亮・行事
		高階経仲	春宮権大進

註 典拠は、全て『山槐記』治承3年正月22日条。

した白河上皇以後の院権力はその主体たりえた⁽⁴³⁾。だが、平家の場合はその先例を持たない。重盛が諸国所課を差配した本事例の画期性を認めること自体は、遠藤氏の見解に賛同する。ただその画期性は、上皇・摂関家と同様に振る舞い得た点というよりは、それまで用途の大口負担者にとどまっていた平家が用途を差配し、儀礼を執行する立場としてあらわれた点にこそ求められるべきであろう。

本章で検討してきた用途調達面で儀礼を執行するケースは、重盛が平家を代表するようになって初めて確認できるものである。さらに、こうした用途調達面にとどまらず、重盛が儀礼・行事の上卿などとしてその進行を

つかさどる立場から執行するケースもあった。次章では、この点についても検討を加え、前章で指摘した重盛が抱えた課題との関係から評価することにした。

第三章 平重盛による儀礼執行

清盛以後、初めて公卿化を果たした平家は、松蘭氏が論じた通り他公卿家と比較して上卿を勤仕した回数が多いとは言えない。これは、公卿の家としての先例が無い以上当然と言えるが、先にも言及したように、そのような条件下にあっても、重盛は勤仕する事例が比較的多かったことが指摘されている。本章では、そうしたケースを検証し、その意義を明らかにしていくを試みる。

(1) 承安四年(一二七四) 相撲節会

承安四年七月八日に右大将に任じられた直後、重盛は記録上で確認できる最後の相撲節会(七月二十七日召合、二十八日拔出)を右近衛府の長官として執行した。

この相撲節会について分析した大日方克己氏は、①召合・拔出の後、高倉天皇が後白河院御所に行幸して一緒に相撲を観覧しており、かつて白河上皇・堀河天皇期に採用された形式を踏襲して後白河上皇・高倉天皇の王権構造を演出する政治的デモンストレーションだった点、②それを重盛に勤仕させ、王権構造内に平家を位置づける意義があった点、を指摘した⁽⁴⁴⁾

では、右大将に任官した直後であった重盛は、近衛府の長官として、い

かにして相撲節会を執行したのだろうか。

まず、相撲人の選定など近衛府自体の準備は、遅くとも三月には始まっており、重盛の任官以前に年預を中心に差配されていたものと見られる⁽⁴⁵⁾。実際、左近衛府の例ではあるが、「中将定能朝臣来、問「相撲之間事」、件人為「左年預」也、去八日本府定了云々」と、年預藤原定能が九条兼実に見を尋ねるなど準備にあたっていた様子が確認できる⁽⁴⁶⁾。従って、右近衛府の場合も同様に、年預や近衛府官人らによって準備が調えられたと推測することが許されよう⁽⁴⁷⁾。

一方で、当日の節会において必要とされた右大将としての作法については、松蘭氏ら多くの先行研究が指摘するように、⁽⁴⁸⁾ 重盛は左大臣藤原経宗を師範として学んでいた。そのことを示すのが、九条兼実が『玉葉』に記した以下の記述である。

今日源中納言雅頼来、数刻談「雑事」也、多是除目事也、納言語云、相撲之間、右將軍作法違例事、依「人々告」伝「聞之」云々、以「左府(藤原経宗)訓」存「金言」之間、有「如此事」、非「無疑殆」之由、自歎息云々、凡左府者、年齢相積之故、頗雖「練」公事、不「受」口伝、不「学」大事、仍有「訛誤事等」歟、就「中大將作法伝」於誰人「哉」⁽⁴⁹⁾

右の通り、兼実は「以「左府訓」存「金言」」じたことが、重盛の作法に「違例」を生じさせた要因だとする会話の内容を記している。兼実がこうした記述を残した理由の一つに、内裏で行われた召合において、左大将藤原師長が「下「自」東階南辺、立「辰巳角壇上」」ったのに対して、右大将重盛は「下「殿立」軒廊」」ったことがあったと見られる。左右の大将の立ち位置が違っていた点について、九条兼実は壇上に立った摂関家出身の左大将師長の作法⁽⁵⁰⁾を支持し、右大将重盛の作法は「依「保安三年例」、可「立」軒廊」之

由、左大臣教訓」と、経宗の「教訓」により、保安三年（一一二二）に右大将であった源有仁が勤仕した際の先例に依拠したものであり、それは「可^レ依^二花園左大臣例^{（源有仁）}之由、殊被^レ執云々、此条似^二守株^一歟」として、批判的な立場をとっていた⁽⁵¹⁾。

ここで重視すべきは、重盛が勤仕した作法が、「花園説」と称される源有仁の説だった点である。清華の家格を有した閑院流藤原氏の家（三条家・徳大寺家・西園寺家）には、源有仁編の儀式書が伝来し、彼らはそこに記された「花園説」を継承していた⁽⁵²⁾。また、「花園説」の第一人者であり、重盛の師範であった経宗の大炊御門家も、清華の家格に位置づけられる。重盛は、この「花園説」の作法を学び、節会の場に臨んでいた。

その一方で、右に引用した『玉葉』を記した兼実が、摂関家の作法とは異なる「花園説」それ自体に批判的な立場をとっていたことが、細谷勘資氏や小川剛生氏によって指摘されている⁽⁵⁴⁾。実際、同年十二月十五日に、経宗が上卿を勤仕した官奏を見物した際にも、兼実は「近代人、大事公事等、偏伺^{（源有仁）}花園左府次第日記等^{（藤原経宗）}」称^レ唯云々、左相府其一也」と記した上で、「今日作法不審事等」と五ヶ条にわたって経宗の作法について批判を書き連ねている⁽⁵⁵⁾。

従って、兼実が相撲節会における重盛の作法に対して「違例」と記した批判は、「花園説」それ自体への不満が含意されていたと理解すべきであり、この批判は重盛が「花園説」の作法通りに振る舞っていたことを示しているのではない。内裏における節会が終わり、法住寺殿（後白河院御所）に会場を移して行う相撲のために高倉天皇が行幸する際にも、重盛は承明門からの出御における右大将の立ち位置をやはり「花園説」の継承に熱心であった三条実房に尋ねている⁽⁵⁶⁾。また細谷氏は、「花園説」は源有仁や経

宗との縁故関係者を中心に継承されたことを明らかにしている。その点でも、源有仁養子の有房に清盛女（忠盛女とも）が嫁ぎ、また重盛息の宗実が経宗の養子となるなど縁故関係があり、重盛が「花園説」を継受する資格を有していたことが確認できる⁽⁵⁷⁾。

以上より、重盛が「花園説」の継承を企図し、実際にその作法に則して相撲節会を執行していたと見て相違なからう。このように、閑院流藤原氏など清華の家格に位置した他の貴族家と同様の作法を学び、それを儀礼の場で実演してみせたことから、平家が清華の家格に到達したことを明示しようとする重盛の意図を読み取ることができるのではなからうか。「執行」という点に視点を据えながら、この時期の重盛の儀礼関与について、もう少し検討を加えていくことにしたい。

（２）承安五年（一一七五）元日節会内弁

承安五年の元日節会において、重盛は内弁として当日の進行をつかさどった。これについて注目したいのは、以下の二点である。

一点目は、十二世紀後半に催行された元日節会における内弁が、原則として摂関家出身者かもしくは清華の家格に相当する公卿たちによって勤仕されていた点である（表４参照）。仁安三年（一一六八）に中納言藤原隆季が勤仕した際に、「中納言内弁頼希代事也」と批判されていることも、そうした慣例があったことを想起させる⁽⁵⁸⁾。従って、右大将に任官した直後の内弁勤仕は、（１）相撲節会の検討によってうかがうことのできた家格の確立を目指す動きの延長線上で捉えられることが了解されよう。

二点目として、内弁勤仕に先立って、重盛が元日節会における内弁作法を見物していたとみられる点があげられる。節会の内弁は、儀礼の進行を

【表4】12世紀後半 元日節会内弁一覧

和暦	内弁	勤仕時官職	出自	備考	典拠
久安7	藤原頼長	左大臣	摂関家	節会停止（諒闇）	台
仁平2	藤原頼長	左大臣	摂関家		本
仁平3	藤原頼長	左大臣	摂関家		本
仁平4	藤原頼長	左大臣	摂関家		台
久寿2	藤原頼長	左大臣	摂関家		台
久寿3	藤原公教	大納言	閑院流（三条）	節会停止（兵革）	兵
保元2	—	—	—		兵
保元3	藤原伊通	左大臣	頼宗流		兵
保元4	（未詳）	—	—		一
平治2	—	—	—		歴
永暦2	（未詳）	—	—	「中納言内弁頗希代事也」	一
応保2	（未詳）	—	—		一
応保3	（未詳）	—	—		山
長寛2	（未詳）	—	—		一
長寛3	藤原経宗	右大臣	大炊御門		山
永万2	（未詳）	—	—		一
仁安2	源定房	権大納言	村上源氏		兵
仁安3	藤原隆季	中納言	四条		玉・兵
仁安4	源雅通	内大臣	村上源氏		兵
嘉応2	源雅通	内大臣	村上源氏		玉
嘉応3	藤原兼実	右大臣	摂関家（九条）		玉
承安2	源雅通	内大臣	村上源氏		玉
承安3	藤原経宗	左大臣	大炊御門		玉
承安4	藤原兼実	右大臣	摂関家（九条）		玉
承安5	平重盛	権大納言	平家		玉1.2
安元2	藤原隆季	権大納言	四条	節会停止（諒闇）	玉
安元3	—	—	—		玉
治承2	藤原隆季	権大納言	四条		玉
治承3	藤原実房	権大納言	閑院流（三条）		玉・山
治承4	藤原実定	大納言	徳大寺		玉1.2
治承5	藤原経宗	左大臣	大炊御門	節会停止（諒闇）	玉
養和2	—	—	—		保
寿永2	平宗盛	内大臣	平家		玉
寿永3	藤原実定	大納言	閑院流（徳大寺）		玉
元暦2	藤原忠親	権大納言	花山院（中山）		玉
文治2	藤原良通	権大納言	摂関家（九条）		玉
文治3	藤原良通	内大臣	摂関家（九条）		玉
文治4	藤原実家	権大納言	閑院流（徳大寺）		玉1.3
文治5	藤原実定	右大臣	閑院流（徳大寺）		玉
文治6	藤原兼房	大納言	摂関家		玉
建久2	藤原兼雅	右大臣	花山院		玉
建久3	藤原兼雅	右大臣	花山院		玉
建久4	—	—	—		玉・百
建久5	藤原実房	左大臣	閑院流（三条）		玉
建久6	藤原実宗	大納言	閑院流（西園寺）		玉
建久7	藤原良経	内大臣	摂関家（九条）		玉
建久8	藤原隆忠	大納言	摂関家（松殿）	節会停止（日蝕）	猪
建久9	—	—	—		玉・猪
建久10	藤原経房	権大納言	勤修寺（吉田）	日蝕正現せず、急遽挙行	玉・猪

註：典拠欄は、台＝『台記』、本＝『本朝世紀』、兵＝『兵範記』、歴＝『歴代編年集成』

玉＝『玉葉』、山＝『山槐記』、保＝『保暦間記』、猪＝『猪隈閑白記』。

統轄する必要から高度な作法の習得を求められた。末松剛氏は、十二世紀になると外弁の公卿などがその勤めを放棄して、内弁作法を見物する姿が散見することを指摘している⁽⁵⁹⁾。承安二年の元日節会でも、「一日節会平大納言為^(平重盛)外弁上首」、其外公卿四人也、其残五六人、併留徘徊^(平重盛)東階辺、為^(平重盛)見物内弁」と、内弁作法を見物した公卿がいたという。このうち、節会で実際に外弁として着した公卿は、三条実房・花山院兼雅・藤原家通・藤原実綱・藤原頼定の「只五人」であったことが別の史料から確認できる⁽⁶¹⁾。従って、重盛は外弁上首ながら所役を勤めていなかったと見られ、南

殿の東階辺という公卿が見物する際の定例の場において内弁作法を見物していた可能性が高い⁽⁶²⁾。承安五年の元日節会で内弁を勤仕した重盛について、節会当日に外弁を勤めた中御門宗家は「去元日内弁右大将無^(平重盛)殊失云々」と、過失無く節会を進行したとの評価を九条兼実に話していた。その背景には、右のように事前に見物するなどして複雑な作法を習得しようとした重盛の努力があったと見られるのである。

また、重盛が見物した承安二年の元日節会で内弁を勤仕した源雅通は、

村上源氏の嫡流として「伝故実之人」⁽⁶⁴⁾と評された人物であった。源有仁の「花園説」には、雅通父・雅定ら村上源氏の影響が色濃く残っていることが指摘されている⁽⁶⁵⁾。従って、雅通の作法を見物することは、「花園説」の継承を図るという点でも、重盛にとっては魅力的であったと想定される。

なお、重盛の見物行為がこの時期に見られたのは、決して偶然ではなかったように思われる。内弁作法の見物から半月ほど遡る承安元年十二月に、徳子が入内していたからである。つまり、重盛が内弁作法を見物したのは、外戚化にともない清華の家格に手をかけた直後のことということになり、家格の向上を意識しての行動だと理解すれば、その動機にも説明がつく。

以上より、重盛が内弁を勤仕した承安五年の元日節会は、平家の家格が清華に到達したことを示す舞台となっていたといえよう⁽⁶⁶⁾。重盛は、儀礼の執行を一つの手段に、平家を公卿の家として確立させようと動いていたのである。

(3) 安元三年(一一七七)任大臣大饗

安元三年三月五日、任大臣節会が催され、重盛は内大臣に任じられて清華の家格の極官である大臣への昇進を果たした。この節会は当初、二月十日に行われる予定となっていた。だが、重盛(同年正月二十五日、左大將に任官)は任大臣を延引するよう要請していた。その経緯を記したのが、以下に掲げた『愚昧記』の一節である。

今日任大臣有無不定、是左大將未入洛之故也、入夜之後適入洛云々、亥刻許召使来云、早可参内、^(松殿基房)関白被参云々、驚此告申^(藤原経宗)此由於向殿、示給云、只今自大將許有示遣事、暫不可参内、若延引歟之由覺也、仍相待之間、^(藤原頼光)中將自内裏示送云、延引了

云々、仍前駈以下返遣了、延引事入道依我例不可設饗之由云々、而重盛卿云、近衛大將任大臣之時、争不儲饗哉云々、且此旨申合左府^(藤原経宗)之处、有大饗可宜之由示給之故、大將申院申延了也、可然歟、自本不可有饗之由勿論歟、入道例雖可然、如大將示大將任大臣争不饗哉、彼ハ別儀也、⁽⁶⁷⁾

(引用史料中の傍線は筆者による)

熊野詣に出向いていた重盛は、任大臣が予定された当日になっても帰京せず、その日の夜になって入京した。そして、藤原経宗と相談の上、後白河上皇の了承も取り付けて、急遽、任大臣節会を延引することにしたというのである。

その理由が興味深い。すなわち、父・清盛が自身の先例と同様に任大臣節会にともない催される大饗を実施しなくて良いと指示したのに対して、重盛は、近衛大將に任官した以上、大饗を実施すべきだと主張してそれに拘ったからだだったというのである(傍線部①)。このことは、同日の『玉葉』に「今日任大臣延引了云々、左大將今日入洛、猶有可儲饗之志、因之俄延引云々」と明記されていることから確認が取れる⁽⁶⁸⁾。

ここで注目したいのが、引用史料『愚昧記』の記主・三条実房が、清盛が大饗を催さないことは「可然」だが、重盛は大饗を催すべきとの見解を示していた点である(傍線部②)。清盛が内大臣・太政大臣の任官時にも大饗を催さなかったのは、「不經大將之人」と、近衛大將への任官経験がないということが理由の一つであった。実際、清盛以前にも同様の先例があったことが、清盛の任大臣に関する記事を載せた『兵範記』に記されている⁽⁶⁹⁾。それに加えて何より、一章で論じたように、清盛の大臣昇進は現任公卿からの引退を前提としたものであった。そうした特殊な性格の任

大臣である以上、太政官官人との序列を確認する行事⁽⁷¹⁾であった大饗を催す必要はないとの現実的な判断が働いたものと見られ、実施は見送られたのであろう。清盛の先例が「可然」とされたのは、こうした事情ゆえと考えられる。

だが、重盛の任大臣は清盛の場合とは明らかに事情が異なる。重盛の場合は、これまで検討してきた通り公卿としての実績を積んでいただけでなく、左右の近衛大将を歴任しており、清華の家格の昇進コースに即した大臣任官であった。また、重盛は大臣に任じられて以後、治承三年（一一七九）七月に亡くなる直前に辞退するまで二年以上に及んで現任を続けており、当然ながら引退を前提とした昇進ではない。加えて先述の通り重盛は、自身の昇進を次世代以降へも引き継ぎ、清華の家格を定着させることを課題としていた。従って、任大臣節会とセットで催されるのが通例となっていた大饗の実施にはどうしても拘る必要があった。重盛の場合は、大饗を催さねばならない明確な理由があったのである。同じく清華の家格に位置した三条実房が、「如^(平重盛)大将^(平重盛)示^(平重盛)大将任大臣争不饗哉」と、重盛の姿勢に対して理解を示していたことも、重盛の判断の妥当性を裏づけてくれるものと言えよう。

こうした事情ゆえに大饗を実施することに拘りを見せた重盛の主張が認められた結果、二月二十九日に当初は省略されていた兼宣旨が下り⁽⁷²⁾、三月五日には任大臣節会とともに大饗も「饗所儀如例」と、公卿・弁官・少納言・外記・史らを招待して、従来通りに実施された⁽⁷⁴⁾。任大臣大饗の催行に見られた重盛の動きからは、平家を清華の家格に定着させようとする意図をくみ取ることが了解されよう⁽⁷⁵⁾。

以上本章では、（１）相撲節会、（２）元日節会内弁、（３）任大臣大饗に着目して検討を加え、それらを重盛が執行した意義を明らかにすることを試みてきた。その結果、これらの執行に際しては、清華の家格に到達したことを可視化することに意識が向けられており、それにより平家を公卿の家（特に大臣家）として貴族社会に定着させ、後世に残すことが企図されていたと結論づけてよからう。前節で論じた用途調達面での大口負担者↓用途差配者という立場の変化も、このような流れで理解するのが妥当だと考える。

実際、重盛のこうした努力が積極的に作用していた徴証も確認できる。

重盛以後の平家一門（主に嫡流）が、諸大夫層の昇進コースから公達層のそれへと変化しているのである。一つ例をあげると、高橋秀樹氏が指摘したように、重盛が嫡子として取り立てた維盛は、右権少将↓右権中将・蔵人頭と昇進し、公達層のコースに乗って昇進していた⁽⁷⁶⁾。これ以外にも、平家一門嫡流の昇進コースが清華家のそれに改められつつあったことは、白根靖大氏が指摘するところである⁽⁷⁸⁾。また、安元三年五月末のいわゆる「鹿ヶ谷事件」の結果、重盛は直後に左大将を辞職し翌年二月に内大臣についても辞表を提出した際⁽⁷⁹⁾、この辞表が承認されることはなかったものの、その直後から当時権中納言・右大将で平家一門の中で重盛に次ぐ官位を得ていた平宗盛が内大臣に任ぜられるとの噂が貴族社会内で流れていることも興味深い⁽⁸⁰⁾。重盛の努力が前提となり、平家を大臣家（清華家）と見なす認識が生まれはじめていたことが窺えるからである。

確かに、治承三年七月の重盛の死や、平家政権の成立、さらには治承・寿永内乱の勃発といった政治的変動に大きく左右され、また都落ちにともなう平家公卿の解官やその後の滅亡により、平家は公卿の家として家格を

定着させるには至らなかった。だが、少なくとも重盛が平家の代表であった時期には、清華の家格の家として確立させるという課題がある程度達成しており、公卿の家として展開する可能性を十分に持っていたと評価できるのである。

おわりに

本稿では、平重盛が抱えた課題を踏まえながら、重盛による朝廷儀礼の執行を分析することで、その意義を明らかにしようと試みてきた。まずは、その要点をまとめておきたい。

①仁安二年に清盛が太政大臣に昇進し、現任からの引退が目前に迫るにもない、重盛は権大納言に任じられ平家を代表する立場に据えられた。だが、現任引退を前提に異例な形で大臣の壁を突破した清盛の昇進を継承するには、平家の家を大臣任官を極官とする「清華」の家として確立させる必要があった。承安元年の外戚関係の構築、同四年の右大将任官により清華の家格に手をかけた重盛は、以後その実現を目指して努力するようになる。重盛が平家を代表した時期に顕在化する儀礼との関わりは、以上のような重盛が抱えていた課題との関係から評価する必要がある。

②重盛以前、平家一門の用途面での儀礼への関わりは、用途の大口負担者としてのものにとどまる。それに対して、重盛は用途を差配していたことが確認でき、儀礼を執行するようになっていた。

③重盛が儀礼を執行する場面は、上卿など行事の進行役としても確認でき

る。承安四年の右大将任官直後に勤仕した相撲節会や同五年の元日節会では、重盛は藤原経宗や閑院流藤原氏など他の清華家が用いた「花園説」を学んだ上で進行しており、清華の家格に到達したと可視化することに意識が向けられていた。また、清華家の極官である大臣昇進に際しては、引退を前提とした清盛の場合とは異なり、任大臣節会とセットで催されるのが通例だった大饗の実施に拘ることで、平家を清華の家として定着させようと企図していた。

以上より、重盛による儀礼の執行は、平家の家格を確立させるとの課題に対する努力であったと評価でき、重盛が代表だった一一七〇年代の平家は、以後も公卿の家として貴族社会に展開するだけの実績を積み重ねていたものと評価しておきたい。

なお、清華の家格への定着を企図した重盛の動きは、平家に遅れて家格の確立を目指した他の貴族家によって参照されるケースもあったと考える。西園寺家は、他の閑院流藤原氏（三条家・徳大寺家）からは遅れて、鎌倉時代前期になって清華の家格を確立した。このことと関係して着目したいのは、西園寺実宗・公経父子の大臣昇進である。元久二年（一二〇五）十一月、実宗は内大臣に昇進する。実宗以前、西園寺家では六代続けて大臣に昇進することはできなかった⁽⁸¹⁾。その大臣の位を、実宗は獲得した。但し、これは実宗の病や息・公経の妻が源頼朝姪（一条能保女）であったことと関係しての特別な人事であったと見られ、清盛の場合と同様に大饗は催行されず、また翌年三月にわずか四ヶ月足らずの短期間で辞している。

実宗の大臣辞退に際して、公経は「実行ノ大相国息公教内大臣ノソノカミノ例」と、保元二年（一一五七）八月に三条実行が太政大臣を辞退した同日に息・公教が内大臣に昇進した先例に倣い、後鳥羽上皇に近衛大将へ

の任官を奏請したという。結局、大将への任官をめぐって公経が鎌倉幕府を頼る旨の発言をしたため、それに怒った後鳥羽により寵居が命じられるという結果に終わるものの、ここからは父の例外的な任大臣を継承しようとして尽力していた公経の動きを読み取ることができる⁽⁸²⁾。この後、承久三年（一二二一）閏十月、承久の乱後に幕府が口入したことで公経は内大臣に昇進する。その際、公経は兼宣旨を受け、大饗を実施していた⁽⁸³⁾。清華の家格への定着を目指す貴族にとって、任大臣大饗の催行は一つの指標となっていたと見られるのである。西園寺家は、平家の滅亡後に院御厩別当⁽⁸⁴⁾や鳥羽殿の管理者⁽⁸⁵⁾の立場を平家から継承したことが指摘されており、重盛の努力が生み出した先例もその一つとして参照されたのではなからうか。後考を期したい。

また、重盛が清華の家格の確立を企図したことは、貴族社会内部における家の確立にとどまらない目的を有した動きだったと考える。というのは、鳥羽〜後鳥羽院政期にかけて形成された家格を基準に貴族社会が秩序づけられたのと時期を同じくして、荘園領有体系の整備も進んでいたからである。その結果、荘園を主体的に立荘しうる上皇・女院・摂関家が立荘後の荘園の本来（本所）となり、王家領・摂関家領を頂点とする荘園領有体系の下に諸貴族の家領は組み込まれ、各家の家格に応じた領有構造をとって位置づけられていった⁽⁸⁶⁾。

かかる社会的変動の中で、十二世紀第三四半期における立荘推進勢力として平家が活動するには、中央政界での政治的成長や人脈づくりは不可欠であった。清盛が福原に引退した後、一一七〇年代にそれを担ったのは重盛だった。実際、治承元年（一一七七）の五節舞姫にて、丹後守として平師盛（重盛息）が舞姫を献上した際、三条実房や九条兼実など他公卿家か

ら重盛家への訪が確認でき⁽⁸⁷⁾、貴族社会内で慣行化していた扶助的贈与を受するまでになっている。それ以前、こうした負担の大きな儀礼では用途の大口負担者として登場してきた平家が⁽⁸⁸⁾、貴族社会の中で公卿家として認知され援助を受けるまでに成長していたのである。重盛が家格の確立に尽力したことは、荘園制が成立し、それが社会体制として定着していくという中で、家領の存続を図り、またその領有を確固たるものとするという点からも要請された動きだったと見られるのである。

註

(1) 高橋昌明「平家の館について」・「後白河院と平清盛」『平家と六波羅幕府』東京大学出版会、二〇一三年「初出一九九八年・二〇〇四年」一三一・二六頁。

(2) 高橋昌明『清盛以前』（平凡社、二〇一一年「初出一九八四年」）。

(3) 松蘭斎「武家平氏の公卿化について」『九州史学』一一八・一一九、一九九七年。

(4) 元木泰雄「後白河院と平氏」『院政期政治史研究』思文閣出版、一九九六年「初出一九九三年」三〇三頁、下郡剛「後白河院政期における国家意志決定の周辺」『後白河院政の研究』吉川弘文館、一九九九年「初出一九九六年」四三・五二頁。

(5) 前掲註(3)松蘭論文六一、八二〜八三頁。

(6) 石母田正「平氏『政権』について」『石母田正著作集七 古代末期政治史論』岩波書店、一九八九年「初出一九五六年」、上横手雅敬「平氏政権の諸段階」（安田元久先生退任記念論集刊行委員会『日本中世の諸相 上』吉川弘文館、一九八九年）、田中文英「高倉親政・院政と平氏政権」『平

氏政権の研究』思文閣出版、一九九四年）など参照。

(7) 西谷正浩「鎌倉期における貴族の家と荘園」『日本史研究』四二八、一九九八年）、川端新『荘園制成立史の研究』（思文閣出版、二〇〇〇年）。

(8) 拙稿「平家領の形成と領有構造」『史学雑誌』一二二―八、二〇一二年）。

(9) 元木泰雄「平重盛論」（臈谷寿・山中章編『平安京とその時代』思文閣出版、二〇〇九年）二三九頁。

(10) 元木泰雄『平清盛の闘い』（角川書店、二〇〇一年）八三―八四頁、高橋昌明『平清盛 福原の夢』（講談社、二〇〇七年）六五頁では、重盛が東宮大夫に任官した点を重視して、後の大臣就任の布石だったとの指摘がある。但し、後述するように、そうした布石があったとしても、実際に重盛が大臣昇進を果たし、またそれを次世代へと継続させるには、平家を公卿の家として確立させる必要があったと考える。

(11) 橋本義彦「太政大臣沿革考」『平安貴族』平凡社、一九八六年「初出一九八二年」。

(12) 『兵範記』仁安二年五月十日条。五味文彦「平氏軍制の諸段階」『史学雑誌』八八―八、一九七九年）、前掲註(6)上横手論文、前掲註(10)元木著書八二―八三頁、前掲註(10)高橋著書六九―七〇頁など。なお、五味文彦『平清盛』（吉川弘文館、一九九九年）一六六―一六七頁では、仁安二年以前の長寛年間（一一六三―六五）に「海賊追討宣旨」と同様の宣旨が下されていた可能性と、その重盛への継承が論じられている。

(13) 『兵範記』仁安二年五月十七日条。

(14) 前掲註(10)元木著書八〇頁。前掲註(10)高橋著書六五頁。なお、元木氏の理解は『平清盛と後白河院』（角川選書、二〇一二年）九三―九五頁にまとめられている。

(15) 川合康「平家物語とその時代」（川合康編『平家物語を読む』吉川弘文館、二〇〇九年）一一頁。なお、内大臣の任期が短期間のもので、太政大臣就任まで予定されていたとの理解は、前掲註(12)五味著書一七八―一七九頁、前掲註(10)高橋著書六八頁でも指摘されている。

(16) 『兵範記』仁安二年五月十九日・八月三十日・十二月三十日条など。現任引退後も、清盛が国政に発言権を有していたことは、玉井力『院政』支配と貴族官人層』（『平安時代の貴族と天皇』岩波書店、二〇〇〇年「初出一九八七年」）八〇頁、川合康「後白河院と朝廷」『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房、二〇〇四年「初出一九八三年」二九一頁、高橋昌明「後白河院と平清盛」（前掲註(1)著書、「初出二〇〇四年」二五―二六頁などに指摘がある。

(17) 清盛の福原への退隠時期については、高橋昌明「平家の館について」（前掲註(1)著書、「初出一九九八年」）一三一頁参照。『山槐記』治承四年三月五日条。

(18) 清盛の大臣就任期間は、内大臣・太政大臣あわせて半年ほどであり、特に太政大臣の任期中は、二月二十五日―四月六日まで厳島神社へ、四月十二日―十八日までは高野山へ出向いており、清盛段階で大臣の政務に関する先例が平家に蓄積されたとは到底考えられない。

(19) 『玉葉』承安元年十二月二日条。

(20) 橋本義彦「貴族政権の政治構造」『平安貴族』平凡社、一九八六年「初出一九七六年」一〇九頁。

(21) 前掲註(4)元木論文三〇四頁。

(22) 前掲註(10)高橋著書一二〇―一二四頁。『玉葉』承安元年十月二十三日・十一月四日条。

- (23) 前期註(16) 玉井論文九四頁。
- (24) 白根靖大「王朝社会秩序の中の武家の棟梁」(『中世の王朝社会と院政』吉川弘文館、二〇〇〇年「初出一九九八年」) 一八一～五頁。
- (25) 佐伯智広「中世貴族社会における家格の成立」(上横手雅敬編『鎌倉時代の権力と制度』思文閣出版、二〇〇八年)。なお佐伯氏は、「徳大寺家の莊園集積」(『史林』八六一、二〇〇三年)の中で、外戚関係を構築した徳大寺家の家格確立について論じている。
- (26) 『玉葉』承安四年七月九日条。前掲註(3)松蘭論文七五頁。
- (27) 龍肅「六条院領と平正盛」(『平安時代』春秋社、一九六二年)。
- (28) 『中右記』天承二年三月十三日条。前掲註(12)五味著書一七頁。
- (29) 前掲註(10)元木著書七二頁。
- (30) 前掲註(10)高橋著書二九～三〇、六五頁。
- (31) 遠藤基郎「撰関家・上皇・皇族による諸国所課」(『中世王権と王朝儀礼』東京大学出版会、二〇〇八年「初出一九九〇年」) 三四頁。
- (32) 『山槐記』(『御産部類記』所収) 治承二年八月二日条。以下、特に断らない限り、言仁親王産養に関する記述は、全てこれに依拠した。
- (33) 本論中に挙げた受領名は、『山槐記』(『御産部類記』所収) 治承二年八月二日条に名前が列記された順に掲載した。なお、彼らとともに列記された受領名の先頭に「敦佐^{式部大夫家司}」の名前があり、彼も定文に入れられたとされるが、『山槐記』に掲載された定文の中に「敦佐」の名前はない。【表1】に抽出した五夜分の定文には、列記された順に名前が掲載されていることから、「敦佐」は定文の欠落部分(後掲註(34)参照)に記載されていないかと考えられる御前物もしくは威儀御膳の所課を負担したのではないかと想定される。
- (34) 欠落部分については、保安五年(一二二四)通仁親王御産に関する三夜・五夜の定文を掲載する『忠教卿記』(『御産部類記』所収)の記載を参照して補い、【表1】には(御前物)・(威儀御膳)を付け加えて記した。
- (35) 『玉葉』治承二年十月十六日条。なお、この時の春日祭使の用途が諸国所課された点は、遠藤基郎「五節舞姫献上・春日祭使の経営と諸国所課」(前掲註(31)著書) 一三五～八頁に言及がある。遠藤氏はこの事例から院権力による春日祭使の用途の所課代行を論じたが、本稿ではその背景にあった恒例行事と言仁親王御産儀礼との財源の競合という点を重視して言及した。
- (36) 『玉葉』治承二年十月十二日条。
- (37) 『玉葉』治承二年十月十四日条。
- (38) 『玉葉』治承二年十二月十五日条。
- (39) 『玉葉』『山槐記』治承三年正月六日条。
- (40) 『山槐記』治承三年正月六日条。
- (41) 【表2】「国名」欄*印の七ヶ国に加えて、伯耆国・能登国の知行が確認できる。
- (42) 『山槐記』治承三年正月二十二日条。
- (43) 前掲註(31)遠藤論文。白河上皇が撰関家の先例を参照したことは、五五～六頁参照。
- (44) 大日方克己「院政期の王権と相撲儀礼」(『古代文化』六一―三、二〇〇九年)。
- (45) 『吉記』承安四年三月十一日条。相撲節会の準備については、野口実「相

- 撲人と武士」(中世東国史研究会編『中世東国の研究』東京大学出版会、一九八八年)、山中裕「後白河天皇時代の年中行事」(『後白河院』吉川弘文館、一九九三年)、大日方克己「相撲節」(『古代国家と年中行事』講談社、二〇〇八年「初出一九九三年」)を参照した。
- (46)『玉葉』承安四年三月二十六日条。
- (47)なお、相撲人の管理が、これ以後も年預や近衛府官人によって担われていたことが、安元元年八月日「右近衛府牒」(桑幡文書、『平安遺文』三七〇五号)、安元三年四月日「右近衛府政所下文」(桑幡文書、『平安遺文』三七八七号)などで確認できる。
- (48)前掲註(3)松蘭論文、細谷勘資「中御門(大炊御門) 經宗の儀式作法」(『中世朝廷儀式書成立史の研究』勉誠出版、二〇〇七年「初出一九九九年」)など。
- (49)『玉葉』承安四年十月八日条。
- (50)師長の作法の性格については、樋口健太郎「藤原師長論」(『中世撰関家の家と権力』校倉書房、二〇一一年「初出二〇〇五年」)一九六〜一九八頁を参照。
- (51)『玉葉』承安四年七月二十七日条。
- (52)田島公「源有仁編の儀式書の伝来とその意義」(『史林』七三―三、一九九〇年)。
- (53)前掲註(48)細谷論文。
- (54)細谷勘資「撰関家の儀式作法と松殿基房」(前掲註(48)著書、「初出一九九四年」)、小川剛生「知と血 撰関家の公事の説をめぐって」(『院政期文化論集一 権力と文化』森話社、二〇〇一年)。なお、撰関家の作法と「花園説」との差異については、平藤幸「藤原經宗の口伝」(小原仁編『玉葉』を読む) 勉誠出版、二〇一三年) 四〇三頁でも言及されている。
- (55)『玉葉』承安四年十二月十五日条。
- (56)『愚昧記』承安四年八月一日条。三条実房が、父・公教から継承した「花園説」を経宗からも習得しようとしていたことは、前掲註(48)細谷論文二四九〜二五五頁で指摘されている。
- (57)前掲註(48)細谷論文。源有房についての記述は、『尊卑分脉』第三編四八九〜四九〇頁。藤原(平) 宗実についての記述は、『尊卑分脉』第四編三五頁、『吾妻鏡』文治元年十二月十七日条、延慶本『平家物語』第六末「土佐守宗実死給事」を参照。
- (58)『玉葉』仁安三年正月一日条。なお、藤原隆季(四条家)の家格は羽林に該当する。
- (59)末松剛「宮廷儀礼における公卿の『見物』」(『平安宮廷の儀礼文化』吉川弘文館、二〇一〇年)。
- (60)『玉葉』承安二年正月十四日条。
- (61)『愚昧記』承安二年正月一日条。
- (62)南殿の東階辺が内弁作法を見物する際の定例の場であったことは、前掲註(59)末松論文二九四頁を参照。
- (63)『玉葉』承安五年正月三日条。なお、同二日条にも同様の記載がある。
- (64)『玉葉』仁安三年正月十六日条。
- (65)細谷勘資「村上源氏の台頭と儀式作法の成立」(前掲註(48)著書、「初出一九九三年」)。
- (66)なお重盛は、安元二年(一一七六)正月十五日の踏歌節会でも、内弁を「無殊事」く勤仕している(『玉葉』正月十六日条)。

- (67) 『愚昧記』安元三年二月十日条。
- (68) 『玉葉』安元三年二月十日条。
- (69) 『百鍊抄』仁安二年二月十一日条。
- (70) 清盛が内大臣に昇進した際、大饗を催さなかった点について、『兵範記』仁安元年十一月十日条には、先例として①安和二年(九六九)藤原在衡→任右大臣、②天禄三年(九七二)藤原兼通→任内大臣、が挙げられている。なお、両人ともに近衛大将の経験は確認できない。
- (71) 神谷正昌「任大臣大饗の成立と意義」(『国史学』一六七、一九九九年)。
- (72) 前掲註(71)神谷論文によると、平安後期には、内大臣から左・右大臣、もしくは右大臣から左大臣への転任時には行われなかったものの、大臣初任や太政大臣への昇進時には一般に催されていた。この点については、渡邊誠「大臣大饗と太政官」(『九州史学』一五六、二〇一〇年)・「大臣大饗沿革考」(『史人』三、二〇一一年)も参照。
- (73) 『玉葉』安元三年二月七日・二十九日条。
- (74) 『愚昧記』『顕広王記』安元三年三月五日条。なお、『玉葉』同年三月六日条には、大饗に参加した人物の交名が載せられている。それによると、大納言三条実房、権大納言藤原邦綱、権中納言平宗盛・花山院兼雅・平時忠・中山忠親・藤原成範・平頼盛・源雅頼・藤原実綱、参議平教盛・藤原家通・藤原頼定、権右中弁平親宗、左少弁藤原兼光、右少弁藤原光雅、少納言藤原惟基・源師家、大外記清原頼業・中原師尚、大夫史小槻隆職などが出席したことが確認できる。
- (75) 重盛の任大臣大饗をめぐる清盛・重盛の見解の相違は、安元三年段階でも、清盛が平家の家格を清華にまで引き上げることが構想していなかったことを示しているのではないか。この点は、福原移住後の清盛の評価にも関わるものと考えられるため、後考を期したい。
- (76) 高橋秀樹「貴族層における中世的『家』の成立と展開」(『日本中世の家と親族』吉川弘文館、一九九六年)一〇五頁。
- (77) 前掲註(20)橋本論文一〇八頁、前掲註(16)玉井論文八四頁。
- (78) 前掲註(24)白根論文。
- (79) 『玉葉』治承二年二月八日条。
- (80) 『玉葉』治承二年二月二十日条。
- (81) 『玉葉』建暦二年十二月八日条。
- (82) 岡見正雄・赤松俊秀編『日本古典文学大系八六 愚管抄』(岩波書店、一九六七年。以下、『愚管抄』と略記)「巻第六 順徳」三〇八〜九頁。なお、前掲註(25)佐伯論文「中世貴族社会における家格の成立」二四頁では、この事例などをあげながら後鳥羽が清華家の昇進体制を整備したことを論じている。
- (83) 『承久三年四年日次記』承久三年閏十月十日条(『大日本史料』第五編之一、二六六頁)、『愚管抄』「巻第一 今上」一二五頁。
- (84) 木村真美子「中世の院御厩司について」(『学習院大学史料館紀要』一〇、一九九九年)。
- (85) 大村拓生「中世前期の鳥羽と淀」(『日本史研究』四五九、二〇〇〇年)。
- (86) 前掲註(7)西谷論文、前掲註(7)川端著書。
- (87) 『愚昧記』治承元年十一月十八日条、『玉葉』治承元年十一月十九日条。
- (88) 仁安二年(一一六七)の五節舞姫では、後白河上皇から清盛に舞姫献上者の選定につき諮問があり(『兵範記』八月三十日条)、若狭守平経盛が献上している(『兵範記』十一月十三日条)。